名句文に関する論争

水田 恵 純

Abhidharmakośāhāsa (以下 AK) の根品において世親は有部学派が実有として認めている心不相応行法を経量子派の立場から批判した。この批判に有部学派所属の『順正理論』『顯宗論』*Abhidharmatīpa* (以下 AD) が反論を加えた。本稿の目的は心不相応行法の中から名 *naman* 句 *pada* 文 *vyāhjana* のみを取り上げ、有部学派が世親説に対する如何ような反論によつてそれらの実有を証明せんとしたかを検討することにある。

有部学派にあつては、話者の発する語の音声に依つて生じた名が聞者に意味を理解させると主張し、そのような名は心的なものでも物質でもない心不相応行 *viprayuktasankāra* であるとして実在視する。これに対して経量子派は話者の発する契約された音声そのものが直接的に聞者に意味を理解させるものであると見做し、そのような音声とは別なものとしての名の実在を肯定しない。したがつて有部学派の主張する、意味を聞者に理解させる媒体としての名は極微を本性とする語の音声に他ならず、五蘊中の色蘊に属するものであつて心不相応行として行蘊中に撰められるものでないとされる。

このような経量子説に基づいている AK は大略二種の観点より音声为名に作用するものでないとして名の実有に対する批判をなした。批判 I 音声を因として実有としての名が生じるのであれば動

物などの鳴き声すら名を生ぜしめるはずであるから、その名によつて聞者は意味を理解するであろう。しかしそのようなことは実際にはない。そこでそのような過失を除くために特殊な音声 *gotseviseṣa* が名を生ぜしめる主体であるとすれば、意味を理解させるものとして名は必要であつて特殊な音声、すなわち契約された音声 *krī-tāvādir śabdāḥ* だけで十分である。批判 II 音声为名を生ぜしめるとしても、名に対応する音声は複数より成る。rupa なる名を生ぜしめるものは "rupa" と発話された音声であり、それは "r̥rup̥" "p̥r̥" "a" の四音で構成されている。そこで生滅性のある各々の音声の総体が同一刹那に発せられることは不可能である。継起的な音声 "rupa" が一刹那に生じる名 rupa を生ぜしめることはありうべきでない。各々の音声が発せられるにしたがつて名が部分ごとに生じ来たるとしても不合理である。"r̥r̥" が発せられたとき rupa という名の前の部分が、"r̥r̥" で第二の部分が、"p̥r̥" で第三の部分が、"a" で最後の部分がそれぞれ順次に生じることはない。名 rupa は dharma であるから。たとえ部分ごとに生じると認めても、その場合には最後の "r̥r̥" 音に至つて rupa なる完全な名が生じることになり、"rupa" と発したときの最後の一音声 "r̥r̥" のみを聞くものですら名 rupa の意味を理解しうるはずである。が、実際にはそのようなことはない。(Abhk. p. 81. Abhkv pp. 183~184)

名を実在視する見解への世親の批判に対して衆賢は次のように反論した。批判 I への反論 音声と意味間に表示者と被表示者の関係があるならばいかなる音声 (ṣ) (動物の鳴き声) も意味を理解させるはずであるのに必らずしもそうでない。話者は心において適当な名をもつて思惟した後、その思惟せられたものに対応する音声を

発する。それが名に作用し、その名が聞者に意味を理解させる。また契約された音声も聞いてもその時には意味を理解しえないが、後に理解することがある。その理解させるものは音声でなく名である。批反Ⅱへの反論 三世実有論をその学説の基底に置いている有部学派にあつては、継起的な構成員の総体 *“rūpa”* は、最後の音声 *“ra”* が発せられたときには *“rū”*、*“ra”*、*“pā”* は過去に去つていながらもかかわらず、各々影響し合いながら実在している。実有としての各々の音声の総体が名 *rūpa* を生ぜしめる。しかるに過未無体論に立つ経量学派にあつては、*“rūpa”* の音声が発せられるときその中の一音声のみが実在し他の三音声は非実在である。故に四音声が相互に影響し合うことはない。であつてみれば各々の音声はそれぞれ独立的存在であるから、それら各々が名句文に作用することはもちろん意味の表示者ともなりえない。(順正理論 大正 23 p. 414; 415 巴) かくの如く衆賢は世親の批判論法を逆手にとつてそのまま使用し、音声の意味を理解させるものとする場合の難点を示した。さらに加えて音声名等に作用しうることの理論づけをなすことによつて世親の批判に直接答えた。

ところで AD は「名等の三法」は語の音声に依つて生じ、自己の意味を理解させる作用を有し、名辞などの異名がある、と見做されてゐる。(Abhid. p. 108) とまず言ひ、名は意味(Ⅱ対象)と非人為的關係 *apauruṣeyatva* を有し、自己と関係のある意味を聞者に理解させる。各々の音を順々に引き起こす語が名に作用する。最後の音と依存関係にある過去に去つた音 *varṇa* の集まりが、聞者の意識によつて把握されて、関係のある意味についての觀念 *buddhi*(Ⅱ名)を生ぜしめる。そうしてその名が聞者に意味を理解させる (ibid. p.

112)。このように、衆賢のものに比して名に音声作用する仕方の説明は十分とは言えない。むしろ AD の反論は音声の意味を理解させるとする場合の不合理性を指摘することに向けられた。すなわち「名などは音声と別なものである。何故なら接触なき対象を表わすから。」「[音声は] 極微を本性とするから、音響が単一〔の極微〕たることはありえぬ。」(ibid. p. 110, 111) と言ひ、音声は極微の集まりであり、故に接触する対象のみを表わす。それでは極微の達しえない対象 (e.g. 昨日の本・三十三天 etc) を表わさないはずである。従つて音声は意味を理解させるものでない。さらに、一極微は意味を理解させない。二重母音などの場合は極微の積集による言音である。従つて一極微では理解させえないから、諸極微の集まりから成る音音でも意味を理解させえない。このような二つの理由を示している。註釈 *vyāhiti* には更に数種の理由が見られる。それらは、音声は継時的にも一時的にも意味を理解させえない、音声と意味間に理解されるものと理解させるものとの関係 *pratyāyapratyāyakaśambandha* などがありえない、等ひある。(cf. P. S. Jaini: The Vaiśiṣṭika theory of words and meanings. p. 104)

世親は音声名に作用するとする場合に起る不合理点を指摘することによつて名句文が *dhāra* として有ることを否定した。衆賢はその不合理点があるまま音声の意味を理解させるとする場合にもあてはまることを示すことによつて彼の説を批判しただけでなく、音声名に作用しないとすると彼の批判に直接回答し、名の実在性を直接証明した。一方、AD では世親の批判に対し直接解答を与えず、専ら音声の意味を理解させるとする世親説の批判が行なわれており、名の実在について間接証明が主になされている。